
銀杏

風忍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀杏

【Nコード】

N8822F

【作者名】

風忍

【あらすじ】

野球少年を題材にしたちよつとした奇跡？軌跡？の物語です。暑い初夏に彼らが出会ったのは・・・それほど野球の内容はないです。説明になってなくてごめんなさい。5編にするつもりです。全部で1万文字位・・・。読み切っていたら嬉しそうです。

「はじまり」

青く澄み渡った空。

ただただ暑い初夏の日に僕たちは一人の女の人に出会った。

少しずつ町にビルが増え始めた頃、殆どの公園ではボールを使っ
てはいけなかった。その中で

「木下公園」はこの辺りに唯一残ったボールを使うことができる公
園だった。それなりの広さで緑のフェンスに囲まれたこの公園でボ
クは一人、ボールとクラブを持って壁当てをしていた。

兄弟はいない。友達が少ない。野球はいつも一人だった。

ドン、ドン

少しした頃から隣で音がしているのに気づいた。

ふと見ると、隣にもう一人ボクと同じような男の子が壁当てをして
いる。周りに人影は見えない。

一人じゃないよね・・・

男の子がこっちを見た。

どうやらじろじろと見てしまっていたようだ。ボクは慌てて前を向
いてまた壁当てをする。男の子もまた壁当てを始める。

「一緒に野球しない？」

いきなりだった。ボクと男の子が振り返ると女の人が立っていた。

ボールとクラブとバットを持った高校生位の女の人。

「一緒に野球しない？」

「ボクと？」

「いいえ。三人で」

三人

ボクはそっと横を見る。

男の子と目が合った。

「壁当てしてるよりいいでしょ。」

「うん・・・」

満面の笑顔を向けられたせいで思わずたじろいで声が出てしまった。

「じゃあ君がピッチャーね。」

そういつて、ちゃんと返事もしていないのにいきなりボールをボクに渡す。握ってみると違和感がある。

掌の中で回すとイチヨウの葉の刺繍が入っている。

変わったボールだ。

「君はバッターね。」

男の子にはそう言ってバットを渡す。よく見るとバットのグリップも黄色のようだ。

「よし。私は守備ね」と言っってお姉さんは少し下がった。とりあえず、ボクと男の子は首をかしげながら距離をとってみる事にした。

「いくよー。」

ボクはボールを投げた。男の子がバットを振る。ボールは右側に転がった。

そこにお姉さんが走りこんできてパツと捕り、ボクに軽く投げ返した。

またボクが投げる。今度は高く打ち上げてまたお姉さんが捕った。

いつの間にあんな後ろまで走っていたんだろう

何球か後、ボクがバッター、お姉さんがピッチャー、男の子が守備になった。

お姉さんが投げた。ボクがバットを振る。

しかし、バットは空を切りボールは後ろのフェンスに当たった。

もう一度振るが

ガンツとボールはまたフェンスに当たった。

「はあ。」

当たり前もしない

ボクが落ち込んでいるとお姉さんが突然近付いてきた。

「ほい、バット持って、構える」

とボクの横に立つ。

「足はもう少し開く。ここはもつと伸ばして。

ほら、力は抜く。」

とボクの体を動かして構えをつくり離れていった。

「いくよー。」

お姉さんがボールを投げる。

「うわあ」

ボクが慌ててバットを振る。

当たった

当たったと言うより掠った程度だったがそれでも初めての感触が手に伝わる。

次のボールは高く打ちあがった。男の子が落下点で構える。当たり前のように真下のグラブに吸い込まれるだろうと思ったそのボールは意外にも地上に落下していた。男の子のミスだろうがそれでも少しうれしかった。

その五球後、ボールはまた高く上がった。落下点で構える。しかし今度も男の子は落してしまった。

ボクが次に備えて構えるとお姉さんは開いた右手でボクを制した。そして男の子に近付いて行く。

「いい？ボールをまずはよく見て。無理に捕りに行くんじゃなくて待つてあげて。慣れてきたら捕りに行っても大丈夫だから。」

そのような言葉を掛けつつお姉さんが真上に軽くボールを投げあげて何か練習をしていた。

それから、また打ち上がったボールが行ったが今度は危ういながらも捕ることができていた。

何球か後、僕が守備、お姉さんがバッター、男の子がピッチャーになった。

グローブにもイチヨウの刺繍だ。どこかのメーカーかな

「ボールいったよー。」

「うわ」

考え事が吹っ飛んでしまうほどにお姉さんはすごかった。

カーン

ボールはどこまでも飛んで行った。

楽しかった。

男の子も笑っていた。

五時のチャイムが鳴った。

「もうこんな時間？ほら子供は帰る時間よ。」

お姉さんが言った。空がオレンジ色だ。

ボクと男の子は帰ることにした。

話しながら帰った。男の子はボクと同じ年だった。

「木塚 シュン」と言った。

次の日も、その次の日もボクとシュンは公園に通い続けた。

お姉さんはいつも野球をしてくれた。色んなことを教えてくれた。

また、お姉さんは他の男の子にも女の子にも声をかけた。

「人数が多いほうが楽しいじゃない。」

野球は賑やかになっていった。

四人になってキャッチャーをするようになった。五人になって守備が増えた。

まだまだ人数は増えた。

「よし。三角ベースをしよう。」

そう言ってお姉さんはベースを一つ減らした野球の遊び方も教えてくれた。

ベースを書いてゲームができるようになった。

ボクは楽しかった。

打つことも、投げることも、時には落としてしまうことも楽しかった。ゲームをして勝負することも楽しかった。

たくさんの方達もできた。

足が誰より早いコウヘイ君。守備が一番にうまいリカちゃん。シユンはすごくボールが速かった。本当に毎日が楽しかった。

そんなある日。いつものように練習をしようと公園にみんなが集まっていた時だった。

「みんなー」

突然、ユウ君が走ってきた。

「どうしたの？慌てて」

「それが……。この公園がなくなるらしいんだ。」

「えっ」

どうやらユウ君はお母さんから聞いてきたらしい。その後、他の大人にも聞いて回ってきたのだと言った。

そう言われてみれば薄い色の繋ぎの服を着た大人を最近によく見ていた気がする。

「そんな」

ボクはなんだか泣きたくなってきた。

「あら、どうしたの？」

そこにお姉さんがいつものように現れた。

「あの。えっと」ボクは困った。言葉がうまく出てこない。

「この公園」シユンが引き受けてくれた。

「なくなっちゃうって。」

ストツ……

お姉さんの手から銀杏のグラブが落ちた。

「……そっか。」

お姉さんがグラブを拾う。顔をあげる。

「野球やるっ。」

笑っていた。

ふたつめ

キーンコーンカーンコーン

「あら時間。ほら」と言いかけたお姉さんに

「分かってるって。」

「“子供は帰る時間”でしょ。」
という。

「もう。それ私の言葉。」

「へへ。ばいばい。」

いつものようにみんなで帰る。公園を出てしばらく歩いた時、ボクは何か引つ張られる感じがした。

「ごめん。先に行つてて。忘れ物しちゃったから。」

「ドジだなあ。」

「えへへ。ごめん。」

ボクは走った。

まだいた。

「お姉さん。」ボクは呼んだ。

「どうしたの？」

「忘れ物しちゃって。」ボクは嘘をついた。

お姉さんが笑う。

「二人とも？」

「えっ？」

振り返るとシユンが草陰から出てきた。

「ごめん。ついてきちゃった。」シユンが言う。

もしかしたらシユンもボクと同じようなものを感じていたのかも知れない。

「お姉さん。」

「何？」

聞きたいことがあった。

「どうして声をかけてくれたの？」

「野球がしたかったから。」

隣のシュンと顔を見合せて笑う。

「二人ともうまくなったね。」

「本当？」

「うん。とつても。」

今度は二人で得意げな表情になる。

だけれど、

「公園なくなっちゃうって。」

お姉さんが顔を背ける。後ろに立つ大イチョウの木を見上げているようだ。

「そしてみたいだね。」

少し小さくなった声が聞こえる。

「野球ができなくなっちゃう。」

声に出したら胸が苦しくなってきた。

「ここしか、バットもボールも使えない。」

いつもより低いシュンの声が重なる。お姉さんは何も言わない。

「どうしてなくなっちゃうの？」「なんとか絞り出した声で訴える。

「しょうがないことだから。」

お姉さんがボクとシュンの前に立っていた。

「でも」ボクが叫ぶ。

「ありがとう」

「えっ」

消え入りそうな小さな声が聞こえた気がした。

「ほら、もう遅くなっちゃう。帰らないと。」

お姉さんはいつの間にか笑っていた。ボクとシュンの頭をクシャクシヤとなでる。

ボクはシュンと目を合わせて走り出す。

「さようなら。お姉さん。」

「・・・さようなら。」 シュンも言う。

「うん。気をつけてね。」

こんなに眠れない夜は初めてだった。どんなに眠ろうとしても公園のことが頭から離れない。

「お母さん。」

「なに？」

夕飯時に台所に立つ母親に聞いてみた。

「あそこの公園ってなくなるの？」

母が考える。

「ああ、そうだったわねえ。確か回覧板が回って来てたわよ。」母は言った。机の上に放り出された回覧板は母の言葉を裏切ってはくれなかった。

野球に憧れたのは確か五歳くらいの時だった。父が連れて行ってくれた野球場。大きな歓声。広いグラウンド。響くバットの音。相手を打ち捕っていくピッチャー。鋭く、豪快にバットを振り切るバッター。ただ一つの白球を追いかけていく選手達とその全てのプレーに魅せられたのだ。

父は別に秀でてどのチームのファンというわけではなかった。試合のチケットだって、たまたま新聞屋さん gave くれただけだった。

それでもその試合以来、野球を好きになったボクをまた試合に連れて行ってくれるようになったし、休みの日には一緒にキャッチボールをしてくれた。

しかし、ボクが大きくなるにつれキャッチボールをしてくれることはなくなり、仕事が忙しくなって球場に連れて行ってくれることもなくなった。近所の野球クラブに入ろうかと思った時もあったが親に言い出すキツカケがなく、

「子供はお金がかかるわ。」

「もつと働かないと。」

と愚痴をこぼす両親に言い出すことが出来なかった。そのうち
「今更入るには遅すぎる。」と自分で決めつけて諦めた。結局は一
人公園で壁当てをするだけになっていた。

シユンもまた眠れないでいた。

「しょうがないことだから。」

お姉さんに言われた言葉が少し前と重なる。

シユンはこの街の生まれではない。三カ月前に父親の仕事の都合
で転校してきたのだ。

前は一瞬であったが地域の野球チームに入っていた。入ったのが遅
かったから年下の子よりも下手ではあった。でも野球が好きだった。
何倍も練習をして上達し始めた。そんな時だった。

「急だけど引越す。」と言われたのは。

初めてに近いわがママを言った。来月には、楽しみにしていた初試
合があった。

「なんで？来月の試合までは居れるでしょ？」

即答された。

「だめよ。しょうがないでしょ、お父さんの仕事の都合なんだから。」

試合にはお父さんにもお母さんにも来て欲しかった。誕生日に買
ってくれたグローブを使いたかった。見せたかった。

転校してから一度クラブの練習を見に行ったことがあった。でも
練習を見てすぐに諦めた。クラスの中ですらまだ打ち解けられない
でいたシユンには、仲良く楽しそうにしている所に今更入れる気は
しなかった。

それでもクラブを使いたくて野球をしたくて、やっと見つけたボ
ールが使える公園で壁当てを始めたのがお姉さんが声をかけてきた
あの日だった。

次の日の帰り道。少し寝不足のボクとシユンはいつもより早く公園に向かっていた。

「どうしようもないんだよね。」

ボクが切り出す。

「工事の開始は来月からだって。封鎖はもう少し前から。」シユンが答える。

「なくなったらどうする？」

「中学生になって部活に入るまで待つ。」

それしかない。ボクだって分かっている。でも、

「嫌だ。」声が出てくる。

「シユンはいいいのかよ。」

お姉さんが誘ってくれたあの日からボクたちの世界だけは確実に変わった。

「しょうがないだろ。」

シユンはいつの間に関自分自身で呟いていた。

しかし、その言葉は想像した効果を生んではくれなかった。

「しょうがない。」

ボクもまた訳もわからず叫んでいた。

シユンの心に引っかけた言葉を否定する言葉。

「なくなっちゃ嫌なんだ。」

のどに詰まっていた事が溢れ出てきた。

頭を叩かれた気がして顔をあげる。目が合う。シユンが口を開いた

「まったく。」

しばし睨めっこをしておもわず笑う。

「作戦は？」シユンがいたずらっぽく笑みを浮かべて聞いてくる。

「もう決まってる。」ボクも笑顔で返す。やる気さえあれば作戦は昨日の夜に寝る間も惜しんで考えた。去年クラスの担任を受け持ってくれた作文ばかり書かせる苦手な先生へ。

今日だけは感謝します

夕方。公園の帰りにボクとシユンで話を切り出した。
「やってみたい事があるんだ。」

みつつめ

一週間後

ボクとシユンはまた嘘をついた。

「ごめん。忘れ物しちゃった。」

そういつて公園まで二人で走る。やっぱりまだいた。

「お姉さん。」

大きい声で呼ぶ。

「今度は何を忘れたの？」

お姉さんは悪戯っぽい笑みを浮かべて聞いてくる。ボク等も思わず笑う。

「お姉さんに頼みがあつて。」

あいかわらず一言目が緊張して言い出せないボクの代わりにシユンが切り出してくれた。

「頼み？」

二言目ならもう大丈夫。

「うん。あのね、手紙を書いたの。」

少しずつお姉さんに近づく。

「誰に？」

「誰かに。」

そういつて紙の束を渡す。お姉さんは訝しみながら文字を目で追いつ始める。

「これは……。」

「公園をなくしたくないんだ。」

紙の大きさも、字も、長さも、内容もバラバラな紙束には共通して公園の楽しい思い出と“なくさないで”という思いがつづらられている。

「手紙を書いたんだ。」

シユンが続く。

「これを工事をする人に送って。」
去年の授業のとき先生が言っていた。

「請願書、というものを知ってるかな？何かを訴えたいときに書く手紙のようなものだ。教科書の三十八ページ開いて。詳しくはココを読むように。ということでは今回は訴えたいことを作文にしてみようからな。」

そう言っつて原稿用紙3枚以上の地獄の課題が降りかかった。まさか今、こんな風に使うとは思わなかった。

「全員がちゃんと書いてくれたんだ。」

「あなたが考えたの？」

「えつとまあ・・・。」

と頭の中で先生の顔を思い出す。

「本当は」シュンが説明してくれる。

「本当は自分たちで全部やろうと思ったんだけど、どこに送ればいいのかわからなくて。」

そこで止まる。少しの間、誰も口を開かない。

「どうして？」

ボク等はお姉さんを見上げる。

「どうしてそこまでやろうと思ったの？」

答えは決まっていた。

「野球がしたいから。」

ボク等を誘ってくれた日のお姉さんと同じ。

急に少し頭が重くなる。お姉さんが頭をクシャクシャと撫でていた。なんだか前よりも強い気がする。お姉さんの顔が陰でよく見えない。泣いているような気がする。

いや、違った。

「分かった。引き受けた。」

お姉さんはやっぱり笑顔だった。

帰ろうとボクらは走りだした。

「あつお姉さん。」

思ったことがあった。

「あのね。ずっと気になってたんだけど。」

「なに？」

「お姉さんの名前教えて。」

「えっ」

「ああそういえば聞いてなかった。」

とシユンも考え始める。

お姉さんはまだ答えない。

「お姉さん？」

その言葉に弾かれたように顔を上げる。

「ああごめん。えつと木下 杏だよ。」

「杏お姉さん。またね。」

「また。」とシユンも言う。

「さようなら。」

そんなことがあってから二週間ほど後。

夏休みまであと三日と迫っていて、みんなが浮かれ始めた頃だ。

杏お姉さんはまだ来ていなかったけれど、いつものメンバーは大体揃って野球を始めていた。

前よりも黄色いフェンスと紐に囲われて狭くなった公園。あの手紙は役目を果たせなかったようだ。あと一週間程で閉鎖されると思うと名残惜しい。だからなのか最近はみんなの集まりが日に日に早くなっていた。周りもよく見渡すようになった。高い緑のフェンス。ポロポロのベンチ。大きなイチヨウの木。春は満開に咲き誇る桜の木は葉桜となっている。時々通る車。なんだか高そうな車も止まっていた。

次の日ボクとシユンは一番乗りで公園に着いた。二人とも走って
きたからか少し息が荒い。
「ちよっと。君たち。」

よっつめ

いきなり。初めて杏お姉さんと会った時位にいきなり話しかけられた。驚いてすごい勢いで振り返った。

五十歳位のおじさんは唐突にボク等に話しかけてきた。

「君たちだろう。手紙をくれたのは。」

「君たちだろう。手紙をくれたのは。」

問われた言葉の意味がよくわからない。

「ほら。“公園をなくさないで”って手紙だよ。」

「えっ。はっはい。」

驚いた。手紙はすっかり届いていた。受け取って読んでくれていた。

「どうしたー？」

そこへ他のメンバーも走って合流してきた。

「おお。やっぱり。ここ数日練習見てたんだよ。」おじさんの顔がほころぶ。

「なあ。なに？」

他の子は全く理解ができていないようでヒソヒソと耳打ちをする。

いや、まあボクもいまいち事態が呑み込めてないんだけど

代わりにシュンがみんなに説明をしてくれている。

「私は、この公園のところの土地の所有者なんだけれども。あつ所有者って言うのは持ち主っていうことなんだけれども。」

「はい。」理解するのが難しい。

「ここをね。売る気だったんだよ。なんか駐車場にするとかでね。

この街の役所の人に。」

「役所の人は・・・えつと偉い人？」

シュンに聞いてみる。

「まあそんな感じ。」

シュンは簡潔に答えてくれた。

「でもね、次の日に権利書を渡そうって日に手紙が届いてたんだよ。君達の。気になっちゃって。」

「気になったの？」
「ボクが尋ねる。」

「うん。だって差出人が木下公園ってなってるし。そういえば差出人の字はうまかったけど君達の字？」

「えっ。いや違います。」

「そっかあ。あっえっとそれで中に写真も入ってる。」

「写真？」

早口でいろんな内容をこっちゃんにいっぱい話すので分かりにくい。答えるのに必死だ。

「ああそう。これこれ」

そういつて十五枚位の写真を見せてくれた。ボクらが野球をしているところは写っている。「それで見に来てみたら本当に楽しそうに野球しててさ。」

「えっとそれで・・・。」

「ああ。売りに出すのやめたんだ。」

「えっ。」

「いやあ。役所の人に怒られちゃったよ。前日になっていきなりやめたからさあ・・・。」

理解が追いつかない。売るのをやめた？

「じゃあ公園は？」

シユンが答えを急かす。

「もちろん。なくならないよ。」

おじさんの声がやさしい。なんだかぼーっとする。風も暖かいし、鳥の声がよく聞こえる。

周りを見る。みんなと目が合って、うれしくて、抱きついて、帽子を投げて喜んだ。

あれから三日たった。公園のフェンスは取り外され元の公園が戻

ってきた。

でもあの日から杏お姉さんが姿を現さなくなった。最初は

「忙しいんだよ。」

と普通にしていたが、段々と心配になってきた。相変わらず公園がなくならなくなったのだからと公園に集まり野球はしている。

そういえば最近はその土地の所有者？のおじさん、駒田隆さんが練習に来てくれている。

「俺は昔、高校球児だったんだぞ。甲子園にもいったんだ。」

というだけあって駒田さんもすぐうまかった。みんなにやさしく教えてくれている。

「なあちよつと。」

飛ばしたボールを拾いに行ったユウ君が呼んでいる。みんなで走って行ってみるとそこにはボールとバットとグローブが置いてあった。

「これがどうしたの？」

ユカちゃんが尋ねる。

「これって……。」

「あつ」

わかった。無機質な金属のバットに映える黄色いグリップ。ボールとグラブには銀杏の刺繍が入っているから。これは

杏お姉さんの道具だ。

駒田さんが「どうした」といって走ってくる。

「はあ珍しい刺繍の入った道具だなあ。その大イチョウの葉みたいな刺繍だな。」

と持ち上げて見ている。

みんなは目の前に立つ大イチョウの木を見上げた。

「ねえシユン。」

「なに？」

二人だけの帰り道。みんなには用事があると嘘をついてしまった。先に帰っただろう。

「あのさあ」

「うん。」

なかなか切り出せない。シユンもどこか上の空だ。

「多分。」シユンがまた切り出してくれる。

「分かっているとと思うけど。」

手で駒田さんに頼んで貰った写真をもてあそぶ。写真を撮ったのは公園がなくなるかもしれないと知った次の日。ユウ君が記念に撮りたいと言って持ってきていたのだ。集合写真のようなものは杏お姉さんがシャッターを押した。

でもそのほかの写真はユウ君が勝手に試合中に撮っていた。

その写真にランナーに出ていた時の、守備に就いていた時の杏お姉さんが写らないはずはない。

でも、写真のどこにも杏お姉さんの姿はなかった。

「うん。そつだよね。」

「どうしたい？」

「シユンは？」

二人とも口を閉ざしてしまう。

杏お姉さんは今日も来なかった。

次の日。

キンコーンカーンコーン。

いつものチャイムが鳴る。みんなに

「じゃあね。」

と行って今日も二人で残る。

オレンジ色の公園に二つの影が伸びる。

1時間くらいたった。日はほとんど沈んで暗くなってきた。

「子供が遊んでいる時間じゃないぞ。早く帰りなさい。」

「えっ。」

後ろから澄んだ声が聞こえた。ずっと二人で待っていた声。

「杏お姉さん。」

振り返るとそこにはいつもの杏お姉さんが立っていた。

「やっぱり来てくれた。」

「やっぱり?」

お姉さんが不思議そうな顔をする。

「はい。」シユンが話し出す。

「杏お姉さんは絶対ボクらが遅くまで残ったら心配してきてくれるだろうって。」

「・・・はあ。心配させないですよ。」

とため息を吐く。

目が合って三人で笑う。

「あのだ。」

言わなきゃいけないことがあった。

「杏お姉さんってこの公園だよね。」

「杏お姉さんってこの公園だよね。」

「公園って?」

杏お姉さんが言う。表情は暗がりによく見えない。

ボクとシユンは続けることにした。

「だって、名前。木下って。この公園木下公園だし。」ボクが言う。

「道具の刺繍は全部この公園のイチヨウの葉だとはなかなか気付かなかったよ。」シユンも言う。

「写真に写ってないのは怖かったよお。」

ここぞとばかりにボクラは攻め続けた。

「ああー。もうわかった。降参。」

ついに杏お姉さんはうんざりというような声を出した。

「なんでばれたんだよお。」と言っている。

「だって杏お姉さんあまりに毎日来てくれたし・・・」ボクが答え
てみる。

「小学生と同じだけ予定がないのは変だろ。」

とシユンも少し軽口を言う。

「いいじゃない。暇なんだし。野球したいんだし。」そう言ったの
を聞いてボクらは思わず笑ってしまう。

場が静まりかけたころにもう一度切りだす。

「最近はどうして来てくれなくなったの。」

そう言つと杏お姉さんはさびしそうな眼をして話し始めた。

おもいで

ここ三十年程だろうか。公園に来る人が思いきり減ったのは。公園に来てもなぜか手元で機械をいじっている。私達が入る隙間は無い。

昔は皆走り回っていた。

あれはコマといったかな？

一緒に遊びたくて一生懸命練習したら公園で一番うまくなってしまった大変だったな。

ドッチボールも皆よくしていた。思いきり投げたボールがよく緑のフェンスに当たって大きい音をたてていた。鬼ごっこで転んでしまった子をあの水道で何度も見てあげた。

秋にはイチヨウの葉の黄色い絨毯をかき集めて、舞い上げて、人のT シャツの中に投げ入れる悪戯っ子も大勢いた。

そして野球をする子もたくさんいた。思いきり飛ばした打球が何度もイチヨウの木の高老様にぶつかり銀杏の実を落とすこととなっていた。

公園に来るのは子供の時位だ。一人。一人と大人になって来なくなる。でもまた新しい子供たちが通い始める。

そんな子供達を守るだけじゃなくて一緒に遊びたいと願った日から人の姿になれるようになった。

私はなんだろう？

人の言うお化けかもしれない。

必要がないからなのか大人には見えない。

水たまりには映るけど写真や鏡には私は映らない。

最近子供達の間に入る隙間はないからこの姿になることはなかった。

そんな時に出会った二人の少年。隣にいるのに一人ずつ別々に壁当

てをしているのが可笑しくて、久しぶりの野球に胸が躍って思わず声をかけてしまった。

最近は無くなる仲間が増えていた。私達の必要性はもうあまりないのかも知れないと考え始めていた。

壊されると言われてそれは哀しかったけど、でも覚悟は決めていた。まさか助けてくれるなんてなあ・・・

でもイチヨウの長老様の言うことは無視しちゃだめだったんだな。

「最近のこの世の空気は我等を蝕む。昔とは違うのだ。あの姿になるような無理をしたらお主がどうなるか・・・」

それでも野球がしたくなっちゃって、止められなくて。いつの間に関界になっちゃった。しばらくは休まなきゃダメだって。

ああ別に死んじゃうわけじゃないんだけど、人の姿になれないだけでさ

後悔はしてないよ。

とても楽しかったし、みんなすごくうまいんだもん。だから心配しないでね。

ちよっと遊び疲れちゃっただけだから

ありがとう

おわり

太陽照り付ける真夏の空。

葉桜が並んだ道。緑葉をつけた大きなイチョウが日陰を落としていく。

「今日の試合は木下公園記念球場からお送りいたします。」

大きな球場と高いフェンスに囲まれた公園が隣接している。

しばらくぶりのこの姿はやはり気持ちがいい。

球場のライト側応援席。隣には木塚シュンが、その周辺にはあの頃の面影が残った顔が並んでいる。

私が休んでいる間にずいぶんと時間は経ったのね。

九回裏 ニアウト 満塁 興奮してきてメガホンを持つ手に力が

入る。思わず隣の席を叩いてしまった。

「あつ。申し訳あり……。」

こんなに満員なのに隣の席、空いてる

「四番 サード 水村 鷹」

そんなの考えてる場合じゃなかった

大きな歓声が球場に響く。

「タカー」

久しぶりに声が枯れるほどの声を出して叫んだ。

ものすごいチャンス。でもなぜかいつもより緊張が少ない。心が軽い。皆が来ているからかな？

ただ無心に振った。弾けるような高い音。

球場に割れるような音が木霊する。

白球がスタンドまで大きな放物線を描いた。

いつもよりゆっくとダイヤモンドを走る。
ライト側。そこにいる友達に向けて大きくガッツポーズをする。

あの頃の空振りが嘘のようだね

「あっ」

皆が同じ方向を見る。

隣に空いた席。

昔と変わらない人が微笑んでいた。

球場の隣の公園。

二人の少年がキャッチボールをしていた。

「ねえ。」

突然掛けられた声。

「一緒に野球しない？」

おわり（後書き）

5編超えてしまいました・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8822f/>

銀杏

2010年11月5日13時09分発行